

大生院の昔話

城ヶ尾古主塔	2	お種地	3	大生院の水げんか	6
鶴の話	8	カメの子をつく	9	トンドと餅	9
伊賀はんのお祭り	10	大生院につたわる昔話	12	王塚の話	14
「一字一石の塔」	16	竜の谷の雨乞い	17	お城主様のお話	19
渦井川の川止め	21	馬椿の花	22		

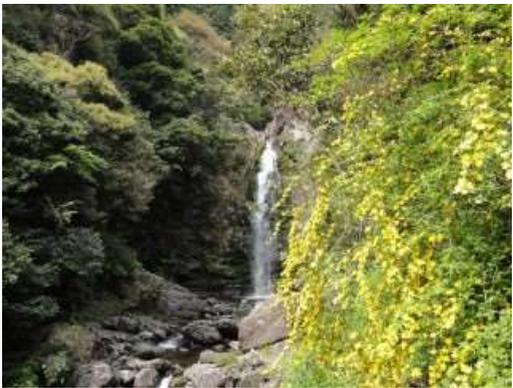
城ヶ尾古主塔

旦ノ上、薬師堂のかたわらに「城ヶ尾古主塔 願主 当村入山分 天明元五年」と刻まれた台座に、お地藏さんを安置した、石造物があります。この城ヶ尾というのは、この薬師堂の南にある小河山にあった小河城のことである。小河山は、西側に渦井川、東側が小河谷にはさまれ、剣のようにとがった尾根につづく山で、その後方に黒森山が続いています。この尾根に小河城があり、戦国乱世にいくどとなく、敵味方入り乱れての戦いが繰り返されてきた所です。現在でも小河城の麓にある、兵糧蔵の跡という所からは、炭化した穀物が採取されるといわれています。小河山は、戦国時代の戦死者の亡霊がただよう山であるということで、人々から恐れられます。あがめられた山であります。昔は日が暮れて小河山から帰らない人があると大騒ぎになり、たいいてい、大けがをしているか、死んでいることが多く、事故の多い山でした。しかし、このお地藏様が建てられてのちは、そういうこともなくなり、薪炭や肥草の採取できる山として大切な山となりました。

(旦ノ上 高塚三郎氏談)

お種地

大生院と中萩は、小松領でありました。廻りは天領といわれ六ヶ村ありました。お種地は、日照りに対して、種をきらさないためでした。正法寺あたりの山部は湿気が多く、干ばつの時にも作物がよくできました。昔の人の用心深さがよくわかります。山吹谷・大野山山口から一里余りに、銚子の滝から下に山吹の群生した所があります。開花のときは黄金の谷のようで、目をみはるばかりで、上手に銚子の滝といって、六、七間の滝があります。絶景であり、最近訪れる人が多くなっています。大生院の山昔はよく山に入って仕事をしましたもの。まず黒森山。その右(西)の方にあるのが、カタブキ山。三角形が傾いているようなのでカタブキ山という。それから黒森山のこちら側にいるのが、シヤクナゲ尾。シヤクナゲの木がたくさんあるからだ。そこから右手の方に愛媛銚山跡。わしらが三七歳頃まで(昭和十



年代初め)は銚石を出していた。その下に、選銚場。ここの銚石には硫化銚がまぎっており、川には魚が育ちにくい。少し下がって、シヤエンの滝。さらにツバクロ滝。ここは暖かいのでツバメが越冬したという。日当たりのよいところだ。それから東から小さな川が合流した所が、一の瀬。一の瀬を小さな川の方(東南)へさかのぼると、二の瀬になり、そこから南の方へ登って行くとき大きなヒノキの株があって、銅の露頭があり、石がくさってフイているという。その露頭の所まではワシは行ったことがないが、たいへんによい露頭で、別子銅山からその下あたりにまで掘ってきているという噂だ。二の瀬から左(東)側にゆくと、ダンジリ岩がある。夫婦岩ともいうが、上は平らで大きな石だ。ワシも一度石の上に登ったことがある。そのあたりでは堅炭を焼いていた。檜・ホウサ・クヌギの木を焼いて炭をつくるのである。ホウサというのはシイタケの栽培によく使う木のことだ。さて、元の二の瀬、一の瀬に戻り、そこから銚子の滝へと流れているのを、ナベラ川という。三方を石に囲まれ、砂地もないのでナベラ(なめらか)川というのだろう。銚子の滝はお酒をつぐトックリの口のような形だから、それで銚子の滝という。今は少し口の所がくずれているが、30〜40尺(尺は30cm)もあるだろうか。銚子の滝から東に入った方には、シンセイ銚山というのがあった。松だけ銚山ともいったが、ワシらは若い時にはネコ車で銚石を下まで運んだ。一俵十六貫(60kg)の銚石を一度に二俵で、一日二回。それで

日に二十八銭もらっていた。ワシらが十六歳（大正中頃）頃の時だ。山から下におろした鉾石は、大生院からは荷馬車で、西条の新浜まで運ぶ人が別にいて一俵五銭、一車に五俵ほど積んでいた。

（大生院栗林 高橋為談）

中萩・大生院の山間部にあたるところに、「ナル」「ナロ」「ナラス」という平坦地にした所がある。成る・平と書き、当の鳴川東平、大多羅、大平、上の平、がある。大生院にはこの地名が大変多い。中ノ成、柿ノ成、ヒナコ成、竹の成、堂の成、谷の成、戸屋ノ鼻山神成、中尾ヶ成、シメジノ成、などである。秀吉の四国征伐の時、敗軍の武士が山に入り、開拓して畑をつくり住んだともいわれている。渦井川をはさんで、奥深く昔の人々の生活のあとがみられる。

大生院の水げんか

大生院の真ん中を流れる渦井川は、徳川幕府の藩政の頃から「水げんか」の話が伝えられています。雨が多くて水のたくさんある年は静かで、何事もないのですが、干ばつが続くと「せき」を破壊して流血をみるほどのけんかになります。昔、庄屋さんが娘の嫁入りにあたって、渦井の水をつけてやったといわれています。渦井川の西を流れる「鮭川」の水を縁者となった飯岡に流すようになりました。要するに持参金のようなもので、しかも大生院に四分、飯岡に六分の水量を流しました。日照りが続くと、鮭川の「旧堰」に大勢の人が集り、鍬や鎌を持って争いました。そのあと、双方より水頭が出て水の当分について決め、日夜番人をつけて水を分けたといわれます。現在では、岸影の方にも水源地ができ、地下水の利用にもなつて水争いもしいに解消されました。古老の話によれば、水げんかは年中行事で、けがをしたり、仲たがえをした人もたくさんいました。



そう古い話でもないのに、今はサクラの名所として人々が集まり、花見や餅投げなど、世の移りかわりを感じるといわれていました。

（大生院 曾我部明光談）

「大生院」は古くは「往生院」と書き、江戸中期頃「大生院村」とかかれ、小松領としるされている。これは、石鉄山、往生院、正法寺の寺の名から、とられたものである。大生院は、西部、市ノ川、早川、大浜などをふくんでいたが、昭和三十一年九月西条市に分轄編入された。仁徳天皇の御代に、多くの秦氏がこの地に来住して大いに発展し、この地の豪族となった。奈良朝末期から、平安初期にかけてこの地に正法寺を創建、当時は七堂伽藍を有する名刹であった。秀吉の四国征伐の折、炎上して現在の地に再建された。

鶴の話

昔は、といっても、明治の前までこのあたりにも、ツルがたびたび飛んできていました。彦右エ門という人の「手控」の中に「ちようど十二月二六日（天保十一年）に山越えしてきたツルに、ワシがとびかゝり、ツルをつかみ組みやいをりし所、善作行きかかり侯てつれ帰り、庄屋所へつれ行き、納屋に置き、番を申し付け候所、七ツ時おち候。」それで小松藩にとどけをしましたところ、ごほうびとしてお金をいただいたと、書かれています。ツルが長淵の谷間に降りて、休んでいるのを見かけた人がありましたが、おふれにより、大切に保護されていたようです。傷ついたりツルを助けて、青ざし（昔のお金）をいただいたとも記録されています。それにしても、マツの緑の上を白ツルが舞う姿を想像するだけでも、胸おどる感じですが、昔の人々と動物の間には、ほのぼのとした心の交流があったのでしょうか。

（大生院 渡辺政雄談）

カメの子をつく

西条三方石は、おついしょうでもろて

小松一万石は、檜の先よ

池普請の時、地面を固めるのに「亀の子」といって丸い石に縄をくくりつけ、八人位で引っぱっては持ち上げて、ドスンと落とした。」をつきながら歌ったものだ。ハー ヨイヨイ ドン ドン ヨイヨイ ソレヤレ モウヒトツソレヤレ ドンドン また、家の「地ぎょう石」をつく時には「たちまち」（木でやぐらを組む）をして、「歌いや」（近隣の歌のじょうずな人）をやとって、お酒を飲んでもらい、美声ではやし歌などを歌ってもらいながら地ぎょう石の所を固めた。今はコンクリートで基礎工事をするのでこのようなことをしなくなった。

トンドと餅

お正月十五日

オシメヲハヤス トウドヤ サンキチャ

アズキ餅ヤ ハヤスエタ モチノカゲハ今日バカリ

現在のようにお米を十分に食べられなかった時代、お餅といえばごちそうであった。そのお餅も正月十五日頃までには食べ尽くしてしまうのである。それでトンドの時には初めに書いたような歌なのである。「サンキチ」というのは「左義長」がなまったものらしい。「スエタ」というのは餅にカビがついてくさることをいうのである。

（大生院 栗林 高橋為談）

伊賀はんのお祭り

「伊賀はんになれば夏じゃ、お薬師さんになれば、夏が終りじゃ。」毎年村人は、そういつてくられて来ました。大生院上本郷（本村）に、五輪の法塔のある墓所があります。毎年七月、高橋家の人々が近在から集まり、法要をしています。その夜は、花火、夜店、餅投げなど、子供たちにとっては楽しい夏の始まりで、浴衣を着せてもらったりしました。伊賀はんの敷地に、樹齢、数百年を経た「ムクの木」が大生院を見下ろすように立っています。村人の喜びや悲しみを、静

かに見てくれているようで、通りがかりの人も思わず手を合わせているようです。「高橋家の中興の祖は、源十郎信義といわれる方です。高橋家は源氏の一族で、このあたりを所領としていました。父、源信光は、往生院村のぶよしの地に屋敷を構え、秦氏の女と結婚し、嫁方の姓を名のり、伊藤源十郎信義と改めました。信義から三世を経て、光孝・正次の代にふたたび高橋姓を名のり、



天正十三年（一五八五）、秀吉の四国攻略の兵乱に出陣し、父と兄は戦死しました。正次はひそかに往生院に帰り、遁世しましたが、秀吉の死後、家門の由緒が認められ、大生院庄屋を拝命し、武士をやめ、農家となり、善兵衛と改め、村をよくおさめ、村人からも尊敬されました。元和六年（一六二〇）年六月十九日歿、伊賀はんとして、今日に至るまでしたわれています。（大生院史誌による）領主を捨て、刀も捨てた善兵衛が「伊賀はん」として村人の心の中に深く生き、今も子供らにも親しまれていることは、まことに微笑ましいことと思われます。

（大生院 高橋寧夫談）

大生院につたわる昔話

昔はこのあたりの山にも、タヌキがいたと、おじいちゃんがいっていました。ある日、獵師が、タヌキをつかまえて帰りました。それは、食べるためではありません。そのころ、タヌキの毛皮は、とても高く売れました。その毛皮は取りごろが大切でしたので、りょうしは、タヌキを箱に入れ飼うことにしました。「きょうは、皮を取っていいかな、いやいや、もっとあとで取ったほうが得かな。」などと、タヌキの目の前でいうのです。もうタヌキは、生きた心地がしません。ある日のことです。獵師は、「もうそろそろ毛皮を取っていいかな、よし、あした皮を取ってやろう。」といいました。さあ、たいへんです。タヌキは、箱の木をがりがりかじってみましたが、箱は開きません。タヌキは、困ってしまいました。やがて夜になりました。ちょうどその時、タヌキの友だちが来て、助けてくれました。月日が経って行きました。りょうしの家の子供は、どうしたわけか、ずんずん気がいになるのです。りょうしは、占い師に、見てもらいました。占い師は、「これは、タヌキのたたりですぞ。」といいました。獵師は、ある日、タヌキに会いました。そこで、タヌキにたずねました。タヌキはいいました。「あなたは、獵師だから、わたしを

捕らえたのは仕方がない。また、私もタヌキだから毛皮を取られても仕方ありません。でも私の目の前で、いつも私の毛皮を、あした取ろうか、あさって取ろうか、などいって、私がどんなに心細いか、どんなに身のちぢむ思いをしたか、おまえさんにわからしてやろうと思っただけ、あなたの子供に祟ったんだ。」といったさうです。りょうしは、自分の罪を深くわびました。

(大生院 中学生談)

平成十二年ごろ境内に迷い込んだ狸



王塚の話

大生院 銀杏の木(地名)に「王塚」という、古墳があります。周りの田畑に囲まれて、高さ約二メートル、三坪弱の石ぐろのような形をしています。地域の人々は、王塚という名のように、皇族の方のお墓と思います。誰かの手をふれませんでした。明治の半ば頃、古墳を掘った人がいましたが、にわか盲目となりそのまゝの状態になっています。お年寄りの方の話によりますと、太刀・玉・埴輪のようなものが出たといわれています。七〇メートルほど離れて、王神社・妙見神社・正法寺と山続きになっています。王塚は、これらの神社・仏閣を建立された方の遺体を葬ったともいい伝えられています。



正法寺・笹ヶ峰の開祖、上仙上人は、皇子のご身分で修験道をおさめられ、この地方一帯に多くの神社をおつくりになったとのことで、王塚はこの皇子のお墓であるとされています。王塚のすぐそばに、樹齢数百年の大イチョウの木があり、いくどかの落雷で原形をとどめていませんが、

うつろな巨大な幹から、新しい枝が繁っています。銀杏の木という地名もこの木からとられたものでしょう。このあたり一帯は正法寺の寺領で、北端に王塚、南に蓮池があり、今も、建倉・ため池・蓮池など田の一枚一枚に名が伝えられています。大正年間、農道をひらく時、多くの土器が発掘されましたが、泥塔は、愛媛県下にも珍しいものといわれています。昔、秦氏の一族が正法寺再建にあたり、京都の地形に似た場所に、祇園社・八幡社・小野宮社などを祀り菩提寺として、寺院を建立され、七堂伽藍をそなえていました。残念ながら四国征伐によって、焼滅し現在の位置に建てられました。その間、王塚と大イチョウは変わりなく世の推移を見守って来ました。王塚がいい伝えのままのものであるか、どうか、今後の発掘を待たねばなりません。

(大生院 大角勇談)

写真 田の中の茂みが正法寺の築山跡と言われている



昔の信仰「一字一石の塔」

私の家から、百メートル西方の徳右南門川の堤防の

所に、高さ二メートルくらいのコンクリートの塔があります。これは、一字一石の塔で、昔の日蓮宗（ホッケ）の方が信仰されたものです。ここは、大生院一六二番地で昔の藪畑のような所です。昭和五十年土木工事によって堤防改修がされることになり、ブルドーザーで掘りくずして行きました。ところが、出るわ、出るわ、工事の人は恐れをなして寄りつかないありさまです。それは、青石（丸みのある五センチぐらいの大きさ）に南無妙法蓮華経と書かれ、俵に二十俵（二トン車一台分）で加茂川のマサゴ石ばかりでした。この地は大角さんという方の土地で御先祖が信心深く、これを祀られたものと思われます。これが、昔の人の信仰で、車もなく、トラックもなく、大八車もなく、人々は肉体を使って、加茂川からこれ運びました。信仰と奉仕の気持ちがかがえます。これと同じものが銀杏ノ木の法華堂の前に二つあります。私は日蓮宗ではありませんが、たまたま発掘に立ち合い、昔の人の純粋な信仰心にふれ、感動しました。一字一石の塔に秘められた願いは、やはり、人々の幸せと、世の平和を願ったものと信じます。

(大生院 渡辺政雄談)

竜の谷の雨乞い

大生院戸屋ノ鼻の奥に、竜の谷といわれる谷があります。この谷の近くには、半田山の古墳や、土器、布目瓦などが発見されています。ある年、日照りが続き、水が涸れ果てたため、村の人々は方策つき、お寺に集まりました。和尚さんは村人の願いを聞かれて、谷川に登られ、七日の「行」をされました。満願の日、午後になって、にわかにかが曇りました。和尚さんは、わらで作ったタツを大空に向かって投げ上げますと、そのまま勢よく飛び去ったといわれています。それから、大雨が降り続き、村人は飢えから救われました。和尚さんの「行」された谷を「タツの谷」と言い伝えられ、谷の水も絶えなく流れています。栄任和尚さんは、天明七年（一七七七）、仁和寺から正法寺にこられました。栄任和尚さんは、仁和寺で入堂され、深仁親王様のお師匠様で学問・知識のすぐれた方でした。それで、朝廷より昇殿（宮中に上がること）、お紋幕をゆるされたお方でした。正法寺にこられてからのち、大僧都 孝賢師をお使いとして、御免状四通、金五両をおくられましたが、栄任さんは、これをうけられず、人々はその徳をたた



えて「徳僧さん」と呼びあがめました。栄任さんは「栄澄」の号をおくられ、亡くなる前に「私のお墓は丸く作らず、角にしなさい。この世にとどまり、苦しい人々を救いたい。」といわれました。今もまっ角な石塔に屋根をつくり、参詣の人が多くといわれています。徳僧さんは、隠居されて岸影の小庵に住まれ、子供たちに学問を教えられました。現在の徳見堂で、明治五年（一八七二）大生院小学校が徳見堂の横に建てられました。これも、深いえにしであると思います。

（大生院 久技一郎談）

竜の谷の近く、戸屋ノ鼻、半田山あたりは、いろいろの古蹟、土器、住居などが発掘されている。石斧、つば、瓦なども完全な形で発見された。最近高速道路の工事により、新しく縄文後期頃の住居跡が掘り出され、小中学生をはじめ考古学研究に興味ある人々で山がにぎわった。これに限らず、この地一帯の保存について考える時がきていると思う。このあたりは「しめじが成」といわれ農耕のあとがみられ、神社を祀り昔の人々の生活のあとがしのばれる。



お城主様のお話

大生院の戸屋ノ鼻にある城山は、今はほとんどが墓地になっています。しかし、その頂上にはサクラの花が咲き、お城主様の「ほこら」があります。「工藤兵部裕重ノ居城、天正年間二七ノ」と、記されていますが、村人は、落城の時にお姫様がお城を落ちのびられたと伝えています。また、お姫様のお供をしたのはイノシシであった、といっています。村人は、夜更けてはこのあたりは、通行せぬようにしていました。月のうち、一回（十五日）は、お



城主様が城山にお帰りになるので、その行列に行き合わせると、災難に遭ったり、命を落とすといわれています。昔は、行列の馬にけられたとか、川に落ちたなどという人もいましたけれども、今は住宅が立ち並び、昔から死人を荼毘にしたところにも墓石が立ち、周りは住宅でいっぱいです。昭和の二〇年頃までは、お葬式は行列でする所が多く、綿の木の間の細い道を、女の人が、白い薄衣を頭からかぶり、葬列に従ってゆっくり山を登って行く様子は、まるでお姫様の行列の

ようで美しいと思えました。安住の地に眠る魂が、静かな夜を願って伝えた話でしょうが、今は城山をつむ住宅地の街頭が、アスファルトの道を照らしています。盆、正月の夕暮れ、城山にともる灯を、見守ってきた先祖の人々が、子や孫に、いつまでもこの山を守ってほしいと願っていることでしょう。

渦井川の川止め

渦井川は、奥深い川のため時々大水が出ることがありました。川止めについては、いろいろおもしろい話がありまして、川止めになると、村の若者たちが、話しの主人公となりました。丸裸でふんどし一つ、旅人をつぎつぎと渡してゆきました。水の多いときは、一人を三人ぐらいで渡し、男も女も子供も、区別がありません。若い女の人は恥ずかしがったりしておもしろい風景をたびたびみました。当時、川の東西には宿屋もなく、十人ぐらいの男の人が渡しをしていました。大生院の川東、川西の間でいろいろな話が残っています。薬師祭に



来て帰りは大雨、そのまま正法寺に泊り、旦の上に田植えに行って、川止めとなり一泊してしま
うなど、今では考えられませんが。このような光景は、台風のために起こるのですから、私たち
は子供のころ「川止め」と聞くと、それ行け、と走ったものです。水の多いときは、大人の胸く
らいの水の中での作業ですから、大人の見物も多かったです。このような時代を過ぎて、大正末
期やっと木造の橋ができ、その後、昭和三〇年ごろ、現在の十一号線ができたのです。渦井川と
は、大水の時「うず」をまいて流れたからという人もあり、昔大生院の豪族であった、秦氏の京
都の邸内の井戸「うすいの井戸」からとったともいわれています。老人の話では、昔はこの川は、
今より山よりを通り、岸影なども、その岸辺であったと思われれます。渦井川の渡しは、ミニ大井
川の光景だったそうです。

(大生院 渡辺政雄談)

馬椿の花

馬椿の花小さくて、開ききらない少女のような花 渦井川の上流、ツバキの大木の群生した所
がある。昔、荷役に疲れた馬が、足を折り死んでしまった。飼主は悲しみ手厚く馬を葬い、その
周りにツバキを植えた。年をへてツバキに花が咲いても、普通のツバキのように開ききらず、飼
主の気持ちちをうったえるようであった。この地を通る人々はこの馬塚にまいったといわれている。

※馬椿は道を外れて川の土手沿いにあります。写真では左の梅林を抜けて川へ下ります。道は銚子の滝へと続く道です。

